

日本体操学会会報 Vol.20/2023.12

ごあいさつ

日本体操学会会長 後藤 洋子

日本体操学会第23回大会が、令和5年9月9日（土）、10日（日）に埼玉県飯能市の駿河台大学で開催されました。ここに学会の様子をご報告したいと思います。

テーマは「動きある学校」から「動き豊かな生活」へです。コロナ禍で動きが制限され、制限が解かれた今でもその後遺症として運動不足による様々な体の不都合が指摘されています。学校生活においてもそれ以外においても、動き豊かな生活となることが求められています。体の調子を整えてよく動ける体をつくる事をねらいとする体操が貢献するのではないかと考えます。

一方、今年は第17回世界体操祭が7月30日-8月5日にアムステルダム（オランダ）で開催されました。参加された学会員の方も多と思います。世界の体操について情報交換や意見交換を通して活発に交流が行われ、今後の体操の方向性を探る手掛かりとなることを願っております。最後になりましたが、学会大会開催に際して多大な時間と労力を費やして下さいました大会組織委員会、実行委員会をはじめ企画・運営に携わってこられたスタッフの皆様に対して、厚く御礼申し上げます。

日本体操学会第23回学会大会報告

第23回学会大会が、駿河台大学（飯能市）にて対面で開催されました。

- 開催日 令和5年9月9日（土）：基調講演、ポスター発表等
9月10日（日）：口頭発表、シンポジウム等

- テーマ 「動きある学校」から「動き豊かな生活」へ

- 学会大会の内容（日本体操学会HP参照）

<https://taisou.jp/wp-content/uploads/2023/09/23rd-2023.9.7.pdf>



基調講演



日本体育大学教授、近藤智靖氏による『動きのある学校』から『動き豊かな生活』へ』というテーマの講演があった。

「動きのある学校 (Bewegte Schule)」は、ドイツ語圏を中心に、学校教育活動の中に運動を積極的に取り入れる試みで、1990

年代後半に現れていた子どもの身体的健康課題や他民族との共生的な学び、スポーツに対する正当化の揺らぎ、といった学校で起こっている課題の解決策として現在も取り組まれている。具体的には、座学で行われる授業に休憩を入れたり、椅子などの学習環境を可動性のあるものに変えたりすることや、教科指導そのものに体全体を使って学ぶような手法がとられ、教育効果を上げている。講演はドイツの学校での実際の授業映像を交えながら展開され、自ら動いていくような学校や生活環境の仕組みづくりや思考の変換について考える機会となる興味深い内容であった。



特別企画 Detlef Mann (デットレフ・マン) 氏 講演

ドイツの体操連盟のことや2025年にライプツィヒで開催される「ドイツ世界体操祭 (インターナショナル・トゥルンフェスト)」の概要について話された。ドイツでは約500万人(高齢者116万、子供青少年200万等)が体操連盟に登録し、18,000のクラブに75,000のリーダーが所属。会員の67%が女性、33%が男性とのこと。2025年のドイツ世界体操祭では15カ国から約80,000人が参加、70万人の観客、600のワークショップ、200の国際発表など計画されていると話された。



講演後に会場からクラブ運営費や男性会員数、会員の所属年数などの質問が出た。デットレフ・マン氏の講演はドイツ語で行われ、通訳は5ヶ月前から駿河台大学に留学中のユリウスさん、そのサポートに駿河台大学准教授の小林先生が担当された。難しい説明は小林先生が訳されたが、ユリウスさんが通訳に奮闘する様子を会場が温かく見守るアットホームな講演であった。

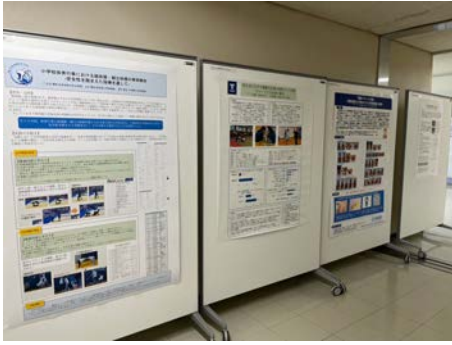


公募研究報告・口頭発表・ポスター研究発表・ポスター実践報告

令和4年度に日本体操学会より研究助成を受けた研究の報告として3つの研究発表がなされた。野上氏の「ラジオ体操の効果 -筋硬度と気分尺度に着目して-」、鈴木氏の「BREAKLETICS が気分を与える影響」、そして早野氏の「日本におけるデンマーク体操の普及と変遷について 実践校のデンマーク体操の特徴と培われる身体知」であった。

口頭発表は4題の発表があり、介入研究や楽曲の制作、動作分析など多分野の手法及び対象者が多世代にわたる特色ある研究がそれぞれ発表された。





ポスター発表は研究発表が 4 題と実践報告 5 題であった。各 1 分間のコンパクトプレゼンテーションがあり、その後 30 分程度、各発表者と自由に意見交換が行われた。研究・実践の対象においても児童から高齢者までと幅広く、内容は体操プログラムの作成や体づくり運動の授業内容検討、世界体操祭の報告等とバラエティに富んでいた。参加者もそれぞれの興味・関心に合わせて積極的なディスカッションが繰り広げられ、充実した発表時間となっていた。

ワークショップ（企画委員会企画）



日本体育大学の小柳将吾先生から「集団演技の作り方」と題し、集団演技創作について説明を受けた後、6 グループに分かれ集団演技を創作した。創作する時のポイントとして「目的・対象・環境・音楽」についてお話があり、「ダンスホール」という曲を用いて創作の手順について説明を受けた。曲構成から振付け方法を聞いた上で、約 30 分間グループに分かれて創作。最後は創作した演技発表を行った。初めて会った人同士でも日頃体操指導を实践されている参加者ばかり。

「登山前の準備運動」や「低学年対象の体操」等、それぞれの得意を生かしたアイデアで 6 グループともユニークな演技となった。冷房の効いた会場だったがワイワイと盛り上がり、汗をかいて演技後はハイタッチで終了。実践に活かせる内容と小柳先生のポイントを押さえた説明で学生もベテラン指導者も会員同士の距離が近づき、まさに「動いて学ぶ、学んで動く」プログラムとなった。



シンポジウム

「学校における集団体操を再検討する」をテーマに行われた。最初に川端昭夫氏（中京大学教授）から「集団体操の歴史と変遷～日本における集団体操の創始、戦後の復活と発展そして現在～」として、大正期に始まった集団体操が戦争に向けて興国主義や式典色が強かったものから、戦後に楽しさや健康へと変遷した歴史を語られた。次に谷口浩幸氏（元武相中学／高等学校校長）からは、長年集団行動を指導された中で、原点は基本の動きをきちんとすること、自分と相手は違うことを意識して伝えることと話されたのが印象的であった。3 人目は大橋敏也氏（都内区立中学校教諭）から、体操が専門



ではない指導者が試行錯誤しながら中学校で集団指導を実践した現状を話された。最後に体操(集団体操)の魅力を伝えるために、体操学会に対して教材の提供や現場への支援の活動に期待すると熱く語られた。

懇親会・世界体操祭報告会

大会1日目の夕方より、懇親会が開催された。懇親会の開催は令和元年の第19回大会ぶりとなった。懇親会の中で、第17回世界体操祭(オランダ・アムステルダム)に参加した3チームの報告が行われ、現地での様子や大会に参加をした学生や教員の実体験を伴う多面的な大会報告がなされた。



令和5年度日本体操学会 総会報告

令和5年度日本体操学会総会が、6月4日(日)にZoomを活用して開催された。各委員会報告とともに第23回大会は駿河台大学で対面での開催で準備が進められていることが報告された。



編集：日本体操学会広報委員会 檜皮 貴子、荒木 達雄、伊藤 由美子、砂田 真弓、早野 曜子、鞠子 佳香